



学園×青春×……クエンティン・タランティノー

dime /daɪm/ 1. 〈可算名詞〉10セント貨。 2. 〈俗〉美しい女性。
3. →drop a dime /密告すること。4. →dime novel /三文小説。

休日のキヴォトス。生徒や市民で賑わう学園都市の片隅で、
シャールから盗まれた一つのアタッシュケース。
それを発端として、数々の勢力を巻き込んだ
騒動が幕を開ける。
便利屋、アビドス、
ティーパーティー、
傭兵、シャール。
混沌とした物語の
果てで、一人の
生徒が見つけた
“奇跡”とは——





休日のキヴォトス、それも昼に差し掛かる頃ともなれば、どの飲食店も盛況だ。

それはD・U・シラトリ区にある、このリーズナブルなファミリーレストランも例外ではない。「つまりね、ハルカ。私達の今の状況を考慮すれば、標的が大きければ大きいほど良いというのは確かよ」

テーブルは多くの人々で埋まり、間を縫うようにトレイを持った店員達が慌ただしく行きかう。その中の一つ。窓際の、日が差し込むボックス席。向かい合って座っている生徒二人組の片割れ——ファアがついたワインレッドのコートを丁寧にたたんで隣に置いていた。——が、スプーンですくったドリアを口に運びながら、窓の外の通りを見やった。

「だけど、標的の大きさとリスクは比例する。分かるかしら。私は経営者として、そういった様々な要素を天秤にかけなければならない立場にあるの」

「流石はアル様です！」

対し、反対側に座っている生徒は、遠慮を押し切られる形で注文されたハンバーグプレートに手を付けないまま。上司が訳知り顔で語る経営論に、尊敬のまなざしで聞き入っていた。

「私は社長だもの。社員の安全と生活を保障したうえで、利益を出すのが仕事。当然のことよ。

……あ、店員さん、コーヒーをいただけるかしら？ 砂糖とミルクもよろしくね」

社長——陸八魔アルが呼び止めると、忙しそうなオートマタは液晶の目を訝しげに細める。

「お客様、見たところドリンクバーの注文はされていないようですが。追加されますか？」

「……………いえ、結構よ。ありがとう」

三〇〇円の出費を逡巡し、アルは少し肩を落として首を振った。

正直言つて、便利屋68の経営状況は悪化の一途をたどっている。ここしばらく、社長の仕事の選り好みは激しいこともあり、なかなか依頼が決まらなかったのだ。

しかし、数日前にようやくブラックマーケットの成金から指名を受けられた。本来なら、今頃はアウトローらしく大口の依頼を華麗に遂行し、多額の報酬を受け取って高笑いしている……はずだったのだが。

「も、申し訳ありません……私が依頼主を吹き飛ばしたばかりに」

「謝ることないわ。ハルカがやらなければムツキがやっていただろうし、ムツキがやらなければ、私かカヨコが撃っていたもの。……とはいえ、これは由々しき事態だわ」

多数の契約外の要求に、あからさまに子供を見下した態度。そして何より、単独指名かと思えば同業他社が複数参加するばら撒き依頼だった上に、報酬は歩合制の山分けというありさまで、はいそうですかと納得できるはずがない。

そんなわけで、アルが依頼を蹴ろうとした瞬間、敬愛する社長に対する不義理を察知したハルカが爆薬でビルを木っ端みじんに吹き飛ばし、追ってくるマーケットガードから逃れるために他の社員とは散り散りになった。つまりは、いつもの便利屋68の顛末である。

しかし、それを説明して先延ばしにしてもらえる家賃の支払いではない。すでに三か月滞納している現状、今日までに振り込まないと寢床がなくなってしまう。

スプーンを置いたアルは、取り出したスマートフォンで広告だらけのアングラな求人サイトをスクロールしてみるのだが、なかなか目を引くものがない。

「支払いが早くて、今できる依頼は……何よこれ！ 連邦生徒会の秘密金庫の襲撃って、こんな銀行強盗の方がずっと楽じゃない！」

謎の覆面ライダーからの求人呆れつつ、アルは頭を抱える。

強きに屈さず、我が道を行く生粋のアウトロー。自分はそういう悪党になりたかったのに。それが今では、ドリンクバーすらつけられずにコーヒーも飲めないありさまだ。

「とりあえず、先立つものがないとどうしようもないわ。安いけど、ひとまずはヘルメット団の依頼でも受けて凌ぎましょうか。早く食べちゃいなさいハルカ。ここは私が奢るから」

「すみませんアル様……い、いただきます……！」

促され、慌てて口にハンバーグを詰め込むハルカ。微笑ましい姿に表情を緩めたアルは、頬杖をつきながら注文したメニューの金額を暗算で確認した。

（……うん、大丈夫。なんとか予算内ね）

コーヒーを我慢した甲斐があった。これなら手持ちで足りるはず。

さて、財布は――

「むぐ、もぐ……ふう。ご、ご馳走様でした……私なんかにはもったいないご飯で……えっと、

と目的の玄関口に立つ。

「とは言っても、アビドスで見て回れるようなところってあんまりないしねえ」

「そういえば、ナギサはブラックマーケットに行きたがってるって先生が言ってた。なんでも、可愛がっている後輩がよく出入りしているから、どんな場所か知りたいんだって」

「ええ……シロコちゃんが不敬するよりよっぽど問題じゃないのそれ……」

アビドスの近くには、治安の悪い区画がいくつかある。だが、そこは決して観光で行くような場所ではないし、事件が起これば外交問題に発展しかねない。

もつとも、先生はそれを避けるために、腕が立つシロコにこの件を任せる判断をしたのだから。

「確かに、私は強盗計画を練ってたからブラックマーケットもよく知ってるし、ボディガードにはうってつけかもしれない。どこに連れてってあげようかな。闇銀行の防犯設備探しとか、現金輸送車の走行ルートを辿って襲撃ポイント巡りとか……」

「それで楽しめるのはシロコちゃんだけだと思ふな。無難に柴関とかにしときなよ」

指折り数え始めたシロコに首を振り、ホシノは目の前の扉を軽くノックする。ドアスコープを手のひらで塞ぐと、鍵を捻る音がして玄関がわずかに開いた。

「えっと、どちら様です？」

星が散ったピンクの瞳がホシノとシロコを確認し、すぐさま引っ込もうとする。だが、それより速く玄関の隙間にスニーカーの爪先をねじ込んだホシノは、扉を強引に押し開いて中へと踏み

込んだ。

「ぎよわ！」

その勢いで、反対側にいた生徒が壁に叩きつけられる。瞳と同じピンクの髪をツインテールにして、白いジャケットを着崩した少女だった。

上がった悲鳴に、ホシノは目もくれない。内部の人数と様子を素早く確認した彼女は、後輩を伴って鷹揚に部屋へと足を踏み込んだ。

「うへへ、やあやあみんな。おはよう」

室内にいるのは、中央の丸テーブルでファストフードの紙袋を並べている一人と、窓際のソファに寝転がっていた一人、そして今し方ドアに弾き飛ばされて赤くなった鼻を押さえている一人、合計三人。

その全員が、朝から現れた突然の闖入者に戸惑いながら目を丸くしていた。

「シロコちゃん、あっち」

「……ん」

「えっと、え、あの、ちよっと！」

無言で部屋の中を突っ切り奥のキッチンへと向かった片割れを制止しようとするが、それも虚しく。正面をホシノに、後方をシロコに挟まれた形となった生徒達は、ただただ困惑しながらも、自分達が何かトラブルに巻きこまれていることだけは辛うじて理解する。

「ああ君、起きなくていいよ。そのままくつろいで。他の子達も、おもてなしとかはしなくて結

構だからね。おじさん達、用が済めばすぐ帰るからさ」

ソファから身を起こそうとした丸眼鏡のミレニウム生を、優しい笑顔で止めるホシノ。顔こそ笑っているが、その柔らかい言葉とは裏腹に有無を言わさぬ圧力を放っていた。

部屋の中には、『これであなたも人生開花！ 遺伝子記憶覚醒波動水』や『電化製品に貼るだけで性能五倍！（当社比）イオン環流型電磁波防止ステッカー』や『砂漠に眠る古代の叡智！ 置けば世界が変わるピラミッドパワー』『巻いたその日からモテまくり勝ちまくり！ 運気を上げるハイパーゲルマニウム・ブレスレット』と書かれた大量の段ボールが山積みになっており、ところどころ穴が開いた壁には『疑似科学部カスタマーサポートセンター』の張り紙が傾いて貼り付けられている。

下にある黒電話には、線が繋がられていなかった。

「おじさん達が誰だか分かるかな」

ホシノが問いかけると、部屋の三人は素早く顔を見合わせる。その表情は相変わらず混乱したまま。

しかし、彼女達がこちらを知っているようにいがいが、アビドスの二人にはどうでもいいことだった。

「分かんないか。君たち……えっと、ああそう。似^え非^せ科学部の問題解決のために、シャーレの代理で来たんだ。シャーレ、知ってるよね？」

「ぎ、疑似科学部です……」

「金庫を開けるなら、普通に鍵を使えばいいのでは？ 壊してしまったら、もう物をしまえないではありませんか」

目を瞬かせるナギサに、シロコはようやく会話が噛み合わない理由を悟る。

「……………自分の金庫なら、そうだね」

そっか、普通の女子高生は他人の金庫を破るって発想がそもそもないんだ。

アビドスの皆は、最初からそれを前提として話に乗ってくれるんだけど。どうにも、他の学校の生徒とは勝手が違うね。

変なところで妙な感慨に浸っているシロコの先、今度は向かいの店を眺めていたナギサの足が止まった。

「あら？」

「ん、また気になるものでもあった？」

「この缶は……まあ！ このような場所で出会えるなんて！」

珍しく大きな声を出す彼女の肩越しに、シロコも店の軒下を覗き込む。

ここで取り扱っている商品は、美術品や希少な道具が多いらしい。まず間違いなく盗品だ。

そんな、乱雑な商品の山の中に隠れるように置かれている、細かな彫刻が施された真鍮の缶。

おそらく、ナギサの目に留まったのはあれだろう。

「アモ缶じゃないし、燃料入れでもない。何それ」

シロコの問いに、ナギサは「これが弾薬や燃料だなんてとんでもない！」と振り返り、両の拳

を握って身を乗り出す。

荒い鼻息と共に腰の翼がパタパタと揺れているのは、本人も気づいているのかどうか。これまでの淑女然とした姿とは違う年相応な表情のナギサに、シロコは若干気圧され気味に仰け反った。
「ん……」

「これはキヴォトス最高級とされるトワイライト社の幻のダージリン、セラフニードルズです！ 外界から隔絶され、傾斜、日射量、月の満ち欠けや天体の動きまでを計算して設計された特別な茶畑で栽培された山海経種茶木を、極秘の製法で完璧に仕上げた一品！ トリニティでもなかなか手に入らず、私もこれまで一度しか口にしたことはありませんが……あの芳醇な香りと口当たりの良さ、喉を通った後にも体を抜けるような爽やかな風味は、今でもたまに夢に見るほどです……ああ、かの伝説の茶葉にこんなところでまた出会えるなんて……オーナー様、オーナー様はいらっしゃいますか！ こちらの茶葉をお譲りいただきたいのですが！」

周囲の目を引くほどの大声でナギサが呼びかけると、薄暗い店の奥から店主が出てくる。顔を見せたのは案の定というべきか、狡猾そうで愛想のない猫顔の店主だった。

「あん？ ああ、それね。ええと、確かこの前のタタキで仕入れたやつだったか。値段は……」
ん、やっぱり盗品、と言いたげなシロコの隣で、ナギサはすでに財布を握りしめて食い入るように店主の言葉を待っている。猫顔の古物商は、そんな彼女の身なりをジロジロと無遠慮に観察すると、値札のない紅茶缶の価値をそれに合わせて釣り上げた。

「よし、特別サービスで五百万にしといてやる」

「分かりました。小切手でよろしいですか？」

「ストップ」

「何でしょうシロコさん」

「おいおい口出しはやめてくれよ。お互い納得して取引してんだ」

きよんとするナギサと、せっかく見つけた金づるを前に顔をしかめる店主。

しかし、ここは物申さないわけにいかない。なにせ、シロコはティーパーティーのホストの安全を任されているのだ。護衛対象が目の前で桁違いのぼったくり被害に遭うのを見過ごしたりしたら、それこそ大問題になる。

「五百万？ ただの紅茶が？」

「ただの紅茶ではありません、セラフニードルズです。高い安い以前に、そもそも値段がついていること自体が奇跡。人生で一度出会えるかどうかの大変貴重な品なのですよ？」

しかし、そんなシロコの助言に真っ向から食って掛かるのは、他でもないふっかけられているナギサだった。

「ん、でも……」

「なんだ嬢ちゃん、これが偽物だって疑ってんのか？ 見てみろ、ちゃあんと保証書付きだぜ」

「しかも未開封です！ 言いがかりはよしてくださいシロコさん！」

畳み掛けるようなナギサの力説に、シロコは思わず黙り込む。おかしい、どうして私が責められてるんだろう。



「追え！ 逃すな！」

夜中のブラックマーケットに、無数の荒々しい足音とオートマタの怒鳴り声が響いた。後ろを時折振り返り、手にしたライフルを撃っては風のように路地を駆け抜ける。幾つ目か分からない角を曲がった彼女は、フルフェイスのヘルメットから夜空を思わせる長い黒髪を流し、手近な暗がりへ飛び込んだ。

「くっ……流石に数が多いな……」

錠前サオリ。アリウススクワッドのリーダーであり、現在は自分探しの最中でもある彼女は、今日も日銭を稼ぐため、身分を隠してグレーゾーンなアルバイトに勤しんでいる。

否、勤しんでいたはずだった。

（先生に連絡するか……いや、これは私の問題だ。騙されただけならまだしも、その場の勢いで武装蜂起に乗ってしまった。そんな責任まで、あの人に押し付けるわけにはいかない）

事が起きたのは一時間ほど前。集めた労働者達を前に、まるで今朝オフィスを爆破でもされたかのように全身傷だらけだったオートマタの雇用主が、急に労働条件を書き換えたことに端を発する。

そもそも、業務開始前のミーティングの時点で、聞かされていた地下トンネル工事という業務

内容に「開通した先の建物での窃盗」という知らない違法行為が付け加えられていたり、現場で着用義務があるヘルメットなどの安全装備を法外な値段で買い取らされたりと、集まったアルバイト達の間には強い不満が溜まっていた。

とどめになったのは、「トンネルの終着を、ブラックマーケットの銃砲店から連邦生徒会の秘密金庫に変更する」という無茶苦茶な指示。

同じブラックマーケット内の銃砲店ならともかく、ここから連邦生徒会までどれだけ距離があると思っているのか。あまりに非現実的な要求だ。

変更指示を聞いた時点で守秘義務が発生し、足抜けは許されない。さらには、報酬は依然変わらず手当も付かないのに、別口で秘密金庫を狙う危険な同業と戦闘になる可能性まであるという。それらを聞かされた時、サオリが抱いたのは諦観だった。「私はまた騙されたのか……」と自分の愚かさを呪いながらも、抵抗など考えず言われた仕事に従事しようとしたのだ。

現状に対して刃向かう権利を長らく奪われていた彼女は、拳を握ることはあっても振り下ろすことを選べない。自分の無知と無力に虚しさを覚えながら、ぐっと堪えて諸々と従うばかり。

しかし、今日は違った。自分の隣で、理不尽に対して毅然と声を上げる者達がいたのだ。

「ともかく追跡をまいて、先に逃した連中に追いつきたいところだが……」

身を潜めた路地の横を通り過ぎていく追っ手を見送り、サオリは頭の中で組み立てた逃走経路を再確認する。

合流を目指しているのは、共に雇われていた見知らぬヘルメット団だ。身元を隠すためフルフ

エイスのメットを被っていたサオリを仲間だと思ったのか、一緒に戦おうと背中を叩いてきた彼女達は、銃を取って雇い主と護衛の傭兵団に果敢に立ち向かい、しかし劣勢に立たされた。

歴戦のサオリから見て、そのヘルメット団は弱い方ではなかった。だが、装備や練度を考慮すれば、傭兵達に戦いを挑んだのは無謀と言えるだろう。

それでも、彼女達の隊長が今にも押し切られそうな前線を維持しながら言い放った言葉は、サオリの胸に微かな熱を灯した。

——確かにこちらは貧乏でバカだけどね！　だからって、大人からいいように使われるほどプライド捨ててないのよ！

その叫びは、自分が探し続けている答えの一端のような気がして。気がつけば、サオリは構えた銃で依頼主の肥満体を、そして眉間を撃ち抜いていた。

当然、そんな暴挙に出れば、傭兵団のヒットリストの一番上に名前が乗る。増援が工事現場に押し寄せることを予想したサオリは、歓声をあげて喜ぶヘルメット団を逃がすために殿を務め、別れる間際に耳打ちされた住所を目指して移動中……という顛末で、逃亡を余儀なくされていた。（ブラックマーケットの境界は目の前。しかし、指定された合流地点まではまだ距離がある。どこかで足を確保したいところだ）

飛び出した道端、街頭の間の暗がりには放置されていた戦車に背を預け、サオリは息を整える。ここまで来れば包囲網は突破できただろうが、足を止めていては直に追いつかれてしまう。かといって、今は真夜中。電車やバスなどの公共交通機関はとつくになくなっている。車を拝借し



「いいや、した！ 君はしたんだよミライちゃん！ セリカちゃんの純真無垢でいたいけな心を裏切った。でも、セリカちゃんをからかっているのはアビドスの生徒と先生だけなんだよ」

狭い倉庫の中。白い髪が汗で額に張り付き、恐怖にすくみ上がった呼吸が荒くなる。

早朝の来客時、たまたま奥の部屋に入っていた疑似科学部の生徒は、度重なる銃声に身を縮みこませ、震えながら扉に耳を押し当てていた。

リビングからは、相変わらず怒号が聞こえる。先程は先生を裏切ったという件を責めていたはずだが、今は自分達の後輩を騙した件を糾弾しているらしい。

これまでも度々、疑似科学部の商品を買った者が「これは詐欺だ」と殴り込んでくることはあった。だが、自分が覚えている限り、今回の二人はそんな奴らとは比べ物にならない。ここまでキレている連中は初めてだ。

本当は部長を助けに行きたいが、先ほどの発砲の後、弾倉を交換する音が聞こえた。今飛び出したところで、自分もまとめて蜂の巣にされるのがオチだろう。

「それじゃあ君にもう一つ、おじさんが尊敬してる先輩の言葉を聞かせてあげる。ユメ先輩の手帳、第二十五章十七節」

「それは流石に嘘ですよ！ なんですか二十五章って！」

ミライの悲鳴を背に、部員は音を立てないようにしながら、倉庫の中に使えそうなものがないか探し始める。

倉庫の管理は自分の仕事だった。この部屋にある在庫は全部頭に入っている。

確か、一つだけ残っていたはずだ。作ったはいいものの、連邦生徒会が定めた銃の規制法案にギリギリ抵触したため、量産まではできなかった超兵器の試作品が。

「ユメ先輩曰く———されば、心正しき生徒の行く道は、心悪しき生徒の利己と暴虐によって行く手を阻まれるものなり。愛と善意の名に依りて、生徒会の谷より弱き者を導きたるかの羊飼いに、砂漠の祝福あれ。何故なら彼女は後輩を守る者。下級生を救う者なり———」

「それ本当に先輩の言葉なんですか!? 絶対に女子高生が言うことじゃないですよね!」

とにかく後輩を大事にしよう的なことを言っているらしい文言を聞き流し、部員は倉庫に並んでいる大きなメタルラックの一番下、片隅にあった段ボール箱を引っ張り出す。

側面に印刷されている文字は「超波動深層ニューロン活性式・ポジトロンアタールEX」。上蓋を開けると、そこには無数のメーターとケーブルが張り巡らされた巨大な回転式拳銃、そしていくつかの備品が収まっていた。

これは、疑似科学部の新たな主力商品として、開発に苦節半年をかけた改造銃器。部員の誰もが太鼓判を押す最高傑作だ。

箱には弾も入っている。これで奴らをやる。やるしかない。

「——アビドスの生徒会長はこう言われる。我が学校を滅ぼそうとする悪しき者達に、私は怒り

に満ちた懲罰をもって、大いなる復讐を彼女らに為す。私が彼女らに讐あだを返すその時！ 彼女らは私がアビドスであることを知るだろう！」

「ま、待ってください！ 戦って問題を解決しても、それは次の争いの火種になるだけなんじゃあばばばばっ！」

「うああああああー！」

立て続く拳銃弾の乱射。部長、そして最近転がり込んできたセミナーの問題児が泣き叫び、やがて静かになる。

ミライはどうなったのだろう。まあ、この分だと失神して床に伸びているか。

部員は一人黙祷し、再び息を殺して頃合いを見計らう。自慢ではないが、こちとら筋金入りのインドア派なのだ。あんなイカレた不良共を相手に、正面から戦えるほどの度胸も腕力もない。

「……ホシノ先輩、こっちはどうする」

「うへー、その子は撃っちゃダメだよ。先生が言ってた内通者だからね」

「そ、そうですよ！ 私が先生に情報流してあげてたんですからね！ ひどいことしないでくださいね！」

新入りの震えた声が響く。あいつ、やはり裏切っていたのか。暗号を解く才能があるからと部長が拾ってきたのはいいものの、部費は勝手に使うし、仕事はやりたがらないし、そのくせ何かとコソコソしていたからおかしいと思っていた。

許せない。裏切り者もまとめて始末してやる。この、超波動深層ニューロン活性式・ポジト